
三つの世界

幻龍ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つの世界

【Nコード】

N5671I

【作者名】

幻龍ナイト

【あらすじ】

まだです

今回は回想だけww

てかあらすじこれでいいのか？

「暇だ！」

何を唐突にこの筋肉たるまは叫んでるんだ？

「何を話してるの？」

ひよこりと恵里が中島の後ろから出てくる

「知らん、中島が何か言っていただけだ」

「冷た！うう恵里さんー貴方はちゃんとツッコミ入れて場を暖かくしてくれるよね？炎の能力だし…」

「場じゃなくてお前の脳味噌を燃やしてやろうか？邪魔だから失せな！」

そう言われて中島は自分の席に戻る、しかしアイツもすごい奴だ…

この学校に来るまで自分は虐めに合っていた

0を1にできてしまうから

周りは自分達とは異質な物を蔑んだ

化け物と実の親さえそう言ってきた…

自分でもそうわかっていた…

この時代、異世界すら自由に渡り歩ける時代でさえ物質をゼロからは作れないのに…

最初は周りに助けを求めた、けど誰も助けてはくれなかった…

その内自分は誰も頼らなく無くなった

家に帰っても喋らない

学校に行っても隅でおとなしく…

喋らず、目立たずに生きた

そしてこの学園へ来た…

正直どこでも良い…遠く学校なら…

そして今自分の机に座り前の奴とニコニコしている中島と出会った

自分のクラスが張り出されても無視して教室に入る

そこで

「こんにちはー！これから1年間よろしく！」

こいつと出会った…

何故俺に挨拶する？と考えた

周りをみると全員がこちらを向いていた…

目立たなくしようという自分の生活はそこから変わった

いくら能力で脅しても、

驚くどころか自分をすごいと言ってきた

自分は負けじと力を使った

次第に力も思い通りに使えるようになった

そして初めて人に対して笑うことを覚えるようになった

(後書き)

てか書き溜めたらすじいじいとww
ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671i/>

三つの世界

2010年10月11日20時54分発行